

# 幼稚園児の居住空間構成法と描画に見る図式の研究

## KINDERGARTEN CHILDREN'S SCHEMA IN MODELS BY ARCHITECTURAL SPACE MONTAGE TECHNIQUE AND DRAWINGS

柳沢和彦\*<sup>1</sup>、岡崎甚幸\*<sup>2</sup>、菊池憲一\*<sup>3</sup>、難波美絵\*<sup>4</sup>

*Kazuhiko YANAGISAWA, Shigeyuki OKAZAKI, Kenichi KIKUCHI,  
and Mie NANBA*

Architectural Space Montage Technique was designed by the authors. The subject's mental schema is represented by spatial composition of miniatures on a 60 cm by 90 cm white plate. The scale for miniatures, such as furniture, people, trees, flowers and many kinds of standardized walls, is 1 to 50. In this experiment twenty-four kindergarten children made 40 models and drawings of the kindergarten. By analyzing each model, the drawing and the children, we clarified characteristics of many types of schema, such as the enclosure of space before structuralization, the birth of the structure, the organization of space.

*Keywords: kindergarten children, kindergarten, schema, development of drawing, intellectual realism,  
Architectural Space Montage Technique*

幼稚園児、幼稚園、図式、描画の発達、知的写実性、居住空間構成法

### 研究の背景と目的

ある教会に所属するのどかな雰囲気の幼稚園がある。ここに通う園児達に、約2年前から、我々の考案した居住空間構成法（以下KK法と略す）を用いて、彼らの身近な存在である幼稚園の模型を作ってもらい、さらに幼稚園の描画を描いてもらっている。KK法とは50分の1の家具、人形、モジュール化された様々な大きさの壁などをホワイトボード上に自由に配置して、被験者に具体的な生活空間の模型を自由に作ってもらう実験である。この方法により、分裂病者<sup>1)</sup>、児童<sup>2)</sup>、知的障害児<sup>3)</sup>の内的世界について報告してきた。

内的世界とは河合<sup>4,5)</sup>が心像 image と言い、ピアジェ<sup>6)</sup>が認識の操作的側面と言ったものである。それは目では直接確認できないが、箱庭療法の作品や描画等を通して外的事物に現れる。衛藤<sup>7)</sup>は「風景の組織化と統合のためには、主体内部に先行的に何らかの内的空間基準が要請される。これは地図のような事物の空間配列指示ではなく、それに先立ち、あらゆる事物の空間配置の可能性を保証し、そのために奥行きと広がりを持った基本的空間性を目に見えない形で支えている基準である」とし、これを「世界図式」とよぶ。ここではこれらに基づき、風景の組織化と統合をそれに先だって支える、表象不可能な内的基準を図式 schema と呼ぶ。園児の図式は大人にも潜在的に共有されていると思われる。

図式には構造的と内容的という二つの側面がある。KK法では、箱庭とは異なり、全ての道具が50分の1のスケールに統一されている。また、モジュール化された抽象的形態の壁を使う。これによって、壁の組合せによる幾何学的形態や家具類の機能的組合せ等がホワイトボード上に現れる。その背後に、表象不可能だがそれらを成り立たせている内的枠組みが存在する。これが図式の構造的側面である。今回の園児の実験では発達という意味において、分裂病者などと異なり、構造的側面が作品に強く現れる傾向がある。KK法や幼稚園の描画では、課題を与えてそれに答えさせるという従来の実験的方法とは異なり、生活空間を制作する行為の中で、日常生活に密着した文脈の中から、生きた状態で図式の構造的側面が現れる。一方それらの作品から、園児の個人的内面の心理、例えば家庭環境や身近な生活での葛藤、成長過程における自己実現のための葛藤などが読みとれることもある。これが図式の内容的側面であり、箱庭で言う心像にあたる。ただしこの側面も、構造的側面を基盤として初めて成立するものである。我々は、実験に毎回同席して下さる園の先生の協力を得ているが、臨床心理学のように、個々の園児の内容的側面を、長期間にわたり深く考察することができないため、この側面に関しては十分な成果を得られない。我々はこれら両側面の関係を、対立するものではなく、生活空間の内的基準を相異なる二面から現す両義的なものであると考える。両者は中井<sup>8)</sup>の構成的空間と投影的空間に相

\* 1 京都大学大学院工学研究科 修士課程

\* 2 京都大学大学院工学研究科 教授・工博

\* 3 (株)アールアイエー 工修

\* 4 (株)環境整備センター 工修

Graduate Student, Graduate School of Engineering, Kyoto Univ.  
Prof., Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., Dr.Eng.  
RIA, M.Eng  
Environmental Design Center, M.Eng.

当するものである。ただし中井は風景構成法や箱庭は構成的で、ロールシャハテストは投影的としているが、我々は前者やKK法、そして描画の中には、構成的と同時に投影的方法も含まれていると考える。

KK法において、図式を基準として実際にボード上に具現化された道具の配置を空間構成と呼ぶ。また、描画で表現された一つの対象を要素という。要素と要素の関係を空間関係と呼ぶ。描画における構造的側面の特徴は、要素の表現様式や空間関係において特に顕著に現れる。本論では、KK法の空間構成と、描画の表現様式や空間関係との比較により、両者に共通する園児の潜在的な図式を解明することを目的とする。

描画は、目の高さから見たり、頭の中で表象した三次元の風景を、それぞれの能力に応じた表現様式を用いて、諸要素とそれらの空間関係として二次元の平面上に描出することによってできあがる。それらを立面図的に表現するのか平面図的に表現するのか迷うことも多く、両者が混在するものもよく見られる。また、KK法では道具にないものは表現できないが、描画では何でも表現できる。このため幼稚園を中心とした生活の中で、園児が何に興味を持っているのかが、KK法の作品で表現されたものの他に、描画によって理解できる。さらに地面を表す基底線のように、現実に見えるもの以外の表現が描画にはある。

一方KK法は、既製のミニチュア模型の道具を選んで、ボード上に順次置くことによってできあがる。従って、描画のように全くの白紙から出発するのではなく、制作前から各道具が被験者に語りかける。さらに描画で一つの要素を表現するという行為は、KK法では一つの道具を選んで置くという行為に相当する。そして置かれた道具とそれらの関係によって被験者の内的世界が三次元的に表現される。そのため描画をうまく描けない園児でも、容易にKK法の制作が可能になることが予想される。

KK法と描画にはこのような表現上の相違があり、図式は、それぞれの表現手法に特化して出てくるものである。しかし両者を比較することにより、それぞれの表現手法を越えたところで、両者に共通する図式を抽出することができるのである。

子供の描画の発達の研究はこれまで多数行われ、そこでは様々な定式化が試みられてきた。例えばリュケ<sup>9)</sup>は偶然の写実性、出来損ないの写実性、知的写実性、視覚的写実性という四つの発達段階を提示する。知的写実性は子供の描画を最も特徴づけるもので、そこで子供は一つの視点から対象を見えるように描くのではなく、その対象について自分が知っていることを描く。ローウェンフェルド<sup>10)</sup>は様式 schema を子供の生活全体の態度に関するものとして重視し、それに基づき六つの発達段階を提示する。他にも多数の定式が存在するが、それらの見解には殆ど大差がなく、一般にはなぐり描き期、図式画 schematic drawing 期、写実画の成立期の3段階に区分される<sup>11)</sup>。一定の決まった型を繰り返し描出し、知的写実性の性格をもつという図式画期が当実験の対象である幼稚園児にほぼ相当する。用語の混乱を防ぐためにここでは図式画を様式画とよぶことにする。

## 1. 被験者および実験方法

### 1-1. 被験者

同一幼稚園の園児24名による、1年8ヶ月間、延べ40回の実験を取りあげる。数カ月を経て2回目の実験をしたものが12名いる。その中で

4名がさらに3回目の実験を行う。以下、氏名はアルファベット二文字で表示し、複数回制作したものはその後数字でその回数を表示する。

### 1-2. 道具

KK法では児童の実験<sup>2)</sup>で用いた道具に、汽車、城などというこの幼稚園にある遊具の模型を加える。門、犬小屋を欲しがることが多かったため、7回目以降に加える。更に、透明ケースに入れた砂利や、現実の幼稚園にはない鏡の壁やアクリルの壁などの道具を24回目以降に加える。幼稚園の描画はF6スケッチブックに鉛筆で描いてもらう。被験者が求めたときだけ消しゴムを使用する。

### 1-3. 実験場所

幼稚園はRC造の棟と木造の棟と外庭から成る。RC造の棟には年中組と年長組、木造の棟には年少組の園児がいる。実験は木造の棟にある応接室で行う。机の上には大型ホワイトボード60cm×90cmが置いてある。その両サイドに小型ホワイトボード30cm×45cmが二枚ずつ置いてある。小型ホワイトボードの上に各種の壁が整理して立ててある。その他の道具はボードの左側に立てた黒い柵H90cm×W86cm×D14cmに整理して並べてある。

### 1-4. 実験の手順

園児が先生に手を引かれて入室する。先生にはそのまま実験に同席してもらう。実験前に各道具の説明をする。「ここにある道具を好きなだけ使って、ボードの上に幼稚園を作って下さい。」「人形の中から自分を決めて好きなところに置いて下さい。」と教示する。園児が「できた」と言った時点をもって完成とみなし作品について質問する。その後「どこに何があるかわかるように幼稚園を絵に描いて下さい。」と教示して描画を描いてもらう。最近ではその後、風景構成法による描画も試みている。

## 2. 実験結果と考察

紙面の都合上、写真と描画は代表的なものを掲載する。KK法の作品を大まかな発達順に列べ、それらを基準にして描画も列べる。そして、作品に見られる幾つかの特徴的な空間構成、表現様式、空間関係を対応させたものが表1である。従って、描画のみを見ると作品の順序が多少前後するものもあるが、その全体的な流れは失っていないと考える。KK法のみ詳しい考察は別稿に譲り、本論では、まず描画における表現様式の主な特徴と、空間関係について報告する。ただしここでいう空間関係とは、要素と要素の関係を示すが、しかし厳密に言うとKK法とは異なり、一つの要素の中にも空間関係は存在する。従って以下に述べる表現様式と空間関係は、互いに密接に絡み合う二重構造の関係にある。その後、表1に基づいてKK法の作品と描画の特徴を比較考察する。それと同時に、代表的な事例の報告も併記する。そして、比較の結果から判明した図式について考察していく。

### 2-1. 描画における各表現様式の主な特徴

本論の描画における表現様式の主な特徴は、以下の通りである(図1)。これらを構造化前、構造的萌芽、構造化の三つに分類する。1) 構造化前/スクリブル: スクリブルは一般に挿画、錯画、なぐり描きを指し、それは次第に単線として輪郭線をなして、円、三角形、正方形などの明確な形を作り出す<sup>11)</sup>。円: 子どもが最初に描く閉じた形は円である。アルンハイムはこの円のことを「本源的円」と名付けた。彼によると「形が分化するまでは、円はまるさをあらわすのではない。それは特にどの形をあらわすのでもない代わり、どんな形でもあらわ



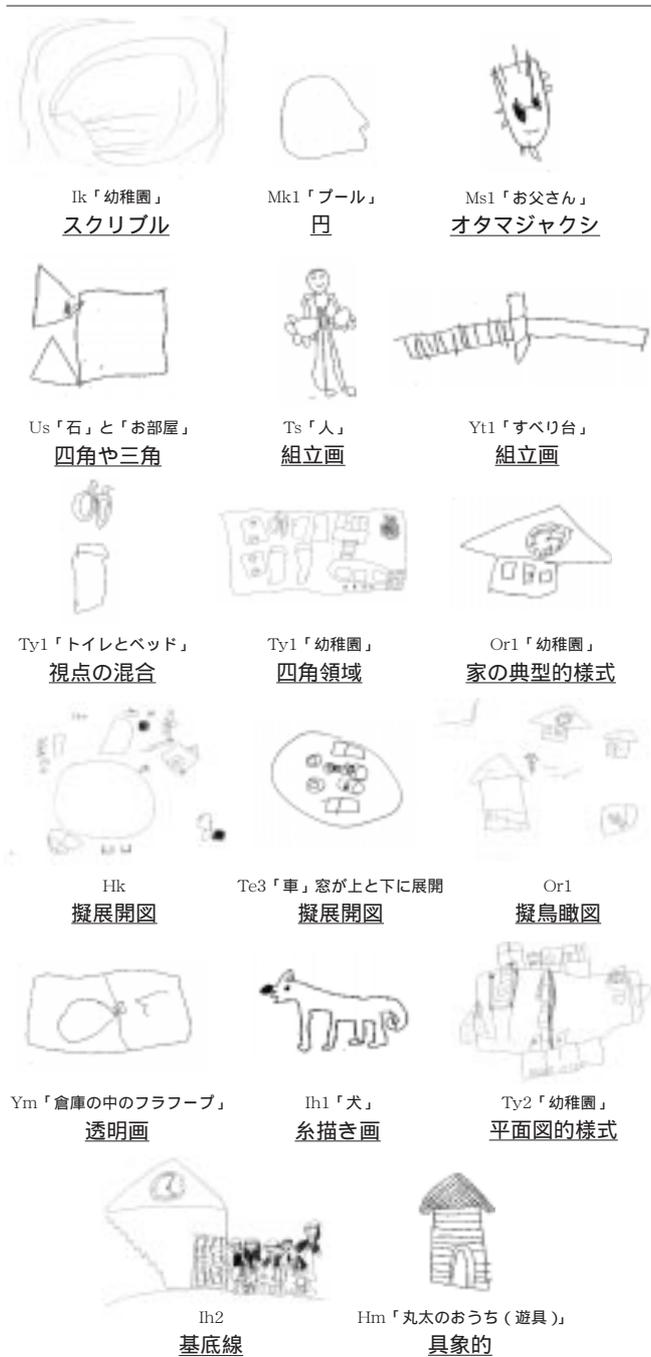


図1 表現様式の特徴

## 2-3. KK法の作品と描画との比較および図式について

KK法を四つの段階に分けることができる。これと同じく、描画も次の四つの段階に分けることができる(表1)。

### 2-3-1. 原初的段階

KK法の「原初的」段階に対応するもの。KK法の原初的段階に見られる空間構成には、道具をボードの片隅にかためて互いに関係希薄のまま配置する偏在、壁による囲いがボード上に有意な場が構成されていない段階でできる原初的囲い、人形や道具を全て制作者に直面させて自己中心的に配置する正面性保持、ボードの枠の縦と横にきちんと道具の方向を揃えて配置する方向性保持、道具を互いに関係希薄のままボード全域にほぼ均等に配置する一様分布、同種の道具を幾つも並べていく列状といったものがある。これらは全て構造化された意味

のある場を持たない空間構成である。

これに対応する描画の原初的段階では、KK法は作るが描画を描かないものが4例ある。また描いても未分化なものが多い。表現様式では、形が分化していないスクリブルや円、そしてそれらが少し発達した四角などが見られる。空間関係も、円による包含やならべ描きで、まだ構造化していない。

入園してまだ間もないHe(1)[以下、()は写真番号、<>は図番号]やUa(2)の作品は、ボード左手前隅に偏在する。これが精一杯で幼稚園の描画は描けなかった。このことから、KK法が幼稚園の描画に比べて制作しやすいものであることがわかる。偏在はボード全体への構成力が乏しいもので、それが幼稚園の描画を描けないことにも影響していると思われる。

Mk1(3)はボードの右手前隅に原初的の囲いを作り、その中に道具を隙間なく詰め込む。この囲いと、さらに「お椅子」などといった彼の丁寧な言葉使いは、家庭の厳しいしつけの現れである。描画<2>でも、KK法とよく似た大きな円を描く。さらにその中に円を二つ描き、それらを「プール」「砂場」という。曖昧な円で包み込んだ原初的な空間関係である。この描画の円と同様に、原初的の囲いは、のちに室や塀として作られる囲いと形こそ似ているが、その具体的な意味付けはまだされていない未分化なものである。

9ヶ月後のMk2(5)の作品は方向性保持に変わった。これは幼稚園との家庭面談、そしてその後の家庭環境の変化による。しかし幼稚園の描画は描けない。さらにその7ヶ月後のMk3(6)の作品もMk2と殆ど変わりがなく、全体の印象は希薄である。Mk2と同様に、今回も幼稚園の描画は描けない。彼は日頃、積木パズルなどが苦手で、そうした生活の文脈が強く関係していると思われる。

Ik(4)も幼稚園全体を表す原初的の囲いを構成する。その後、砂利を透明ケースごとボード上に撒き散らし、砂利による崩壊感<sup>14)</sup>のため模型を壊してしまう。描画<3>も砂利遊びの影響か、スクリブルである。

Mm1は実験直前の午前中におもらしをしてしまい、母親に内緒で先生に下着を乾かしてもらった。このような不安定な気持ちで作られた作品は壁が一様に分布し、全ての壁面が自分の方を向く列状となる。描画<4>では、プールや砂場を塗りつぶして描く。ワロンによると「罪悪感は線によるぬりつぶしの表現」で現れるという<sup>15)</sup>。空間関係はならべ描きでまだ構造化しておらず、画面下方では、正面向きの椅子を六つ反復して描く。一方表現様式は、空間関係に比べてかなり構造化しており、組立画や視点の混合、四角領域まで現れる特例である。

Mm2(7)のKK法はMm1の描画の直後に作られたものである。表現様式がよく描けたため、再度作ってもらった作品である。Mm1とは対照的に壁を全く使わず具体物のみの作品であるが、一様分布、正面性保持、列状という構成は変わらない。描画で見られた正面向きの椅子の反復が、ここでもボード中央に正面向きの列状構成で確認できる。同種の道具の組合せは他の道具でも見られる。彼女もMkと同様に積木パズルなどが苦手で、そうした生活の文脈が強く関係していると思われる。

この原初的段階では、KK法の「原初的の囲い」と描画の「円による包含」、そしてKK法の「列状」と描画の「反復」という対応がある。前者の対応関係から、構造化前における囲う図式があることがわかる。後者の対応関係から、同じものをくり返し配置する図式があることがわかる。ところで列状は、人形や道具を全て制作者に直面させて構成される場合が多く、これは反復にも共通する特徴である。従っ



写真1 He(f4.0) 偏在



写真2 Ua(f4.2) 偏在、正面性保持



写真9 Uk1(f3.11) 列状、家具場など



図6 描画Uk1 オタマジャクシなど



写真3 Mk1(m4.0) 偏在、原初の囲い

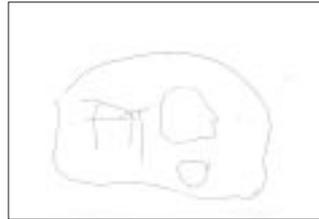


図2 描画Mk1 円など



写真10 Ks1(f3.11) 一様分布など

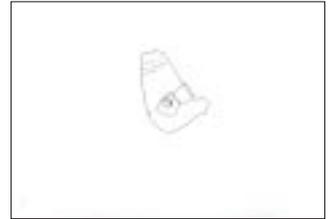


図7 描画Ks1 円など



写真4 Ik(m3.7) 原初の囲い



図3 描画Ik スクリブルなど



写真11 Uk2(f4.6) 列状、家具場など

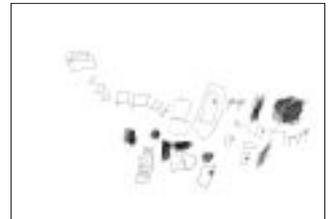


図8 描画Uk2 反復など



写真5 Mk2(m4.9) 方向性保持など



写真6 Mk3(m5.4) 方向性保持



写真12 Mm3(f5.8) 列状、家具場など



図9 描画Mm3 ならべ描きなど



写真7 Mm2(f4.6) 一様分布、列状など

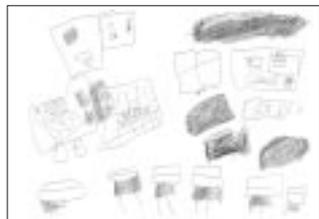


図4 描画Mm1 反復など

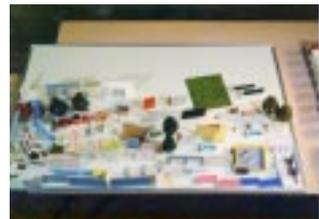


写真13 Us(m4.3) 列状、家具場など



図10 描画Us 四角や三角など



写真8 Ms1(m4.0) 列状、家具場など



図5 描画Ms1 オタマジャクシなど



写真14 Ks2(f4.3) 家具場、接続壁など

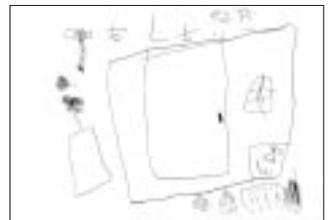


図11 描画Ks2 組立画など

て、ものを自分に対面させて配置する図式があることもわかる。以上は全て、構造化前における図式の構造的側面である。

一方、内容的側面については、Mk1のように厳しい家庭環境が作る図式が、箆を嵌めるような原初の囲いや円による包含関係を表現するもの、Ikのように砂利によって与えられた崩壊感の図式が作品を破壊してしまったり、スクリブルを描出するもの、またMm1のようにお漏らしによる緊張感からくる図式が、列状や反復、ぬりつぶし

となる例などが観察された。

### 2-3-2. 構成的萌芽の段階

KK法の「場の発生」の段階に対応するもの。場の発生の段階とは、KK法の原初の段階の空間構成が依然として見られる中で、例えば机と椅子といった、日常生活で関係がある家具類を組合せることによってできる意味場が、部分的に構成されるものである。それと同時に、壁としてではなく、出入口や衝立として使われる出入口的壁や衝立的



写真15 Te1(f4.8) 不完全囲いなど

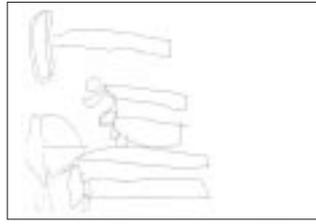


図12 描画 Te1 組立画など



写真21 Ym(m6.5) 不完全囲いなど

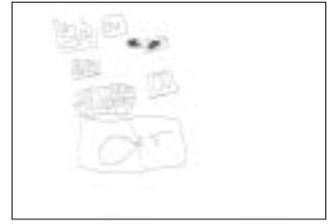


図18 描画 Ym 透明画など



写真16 Ms2(m5.1) 不完全囲いなど



図13 描画 Ms2 家の典型的様式など

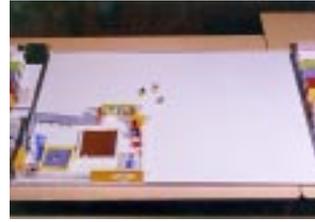


写真22 Or1(f5.5) 包括的囲いなど



図19 描画 Or1 家の典型的様式など



写真17 Ir1(f4.9) 不完全囲いなど

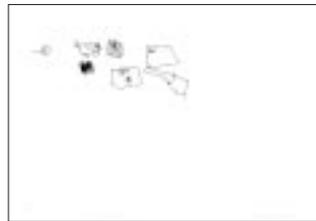


図14 描画 Ir1 組立画など



写真23 Ty1(f5.8) 完全囲いなど



図20 描画 Ty1 四角領域など



写真18 Hk(m6.1) 不完全囲いなど

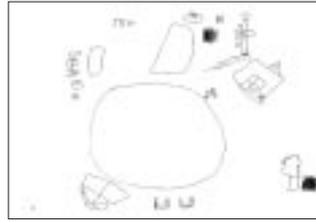


図15 描画 Hk 擬展開図など



写真24 Tm(m4.11) 完全囲い群など

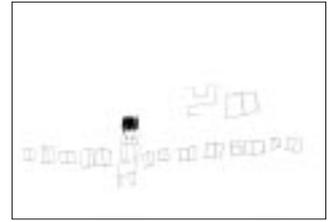


図21 描画 Tm 反復など



写真19 Hm(f6.5) 家具場など

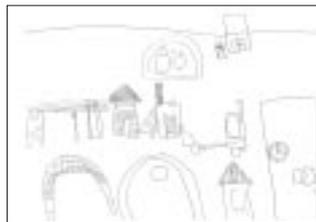


図16 描画 Hm 擬鳥瞰図など



写真25 Te3(f5.11) 包括的囲いなど



図22 描画 Te3 家の典型的様式など



写真20 Yt1(f4.11) 不完全囲いなど



図17 描画 Yt1 組立画など



写真26 lh1(f5.10) 完全囲い群など



図23 描画 lh1 家の典型的様式など

壁、複数の壁を、場の意味に基づいて一直線状に並べる连接的壁が見られる。

これに対応する描画の構成的萌芽の段階では、表現様式において、描画の原初的段階よりも構造化が進み、オタマジャクシ、四角や三角などが現れる。さらに描かれる要素数も多くなる。このように要素の形がはっきりするので、空間関係では円による包含は少なくなり、主にならべ描きや反復となるが、依然としてその構造化は見られない。

しかしMm3<9>、Us<10>、Ks2<11>のように、空間関係の構造化がなんとなく感じられるものもある。またKs1<7>のように、原初的段階の描画と変わらないものもある。

Ms1(8)は同じ形の出入口を持つ壁を列状に並べる。その壁の向こう側にトイレを置いてこのトンネル状の出入口を覗き込み、自分自身が作品の中に入り込む。描画<5>では幼稚園の周りに、オタマジャクシを反復していく。父親が一番大きく、母親、姉、兄、自分の順で小さ



写真27 Or2(f6.9) 完全囲い群など



図24 描画 Or2 擬鳥瞰図など



写真28 Te2(f5.3) 完全囲い群など



図25 描画 Te2 家の典型的の様式など

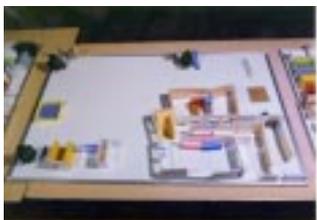


写真29 Kt(m6.3) 室群統括など

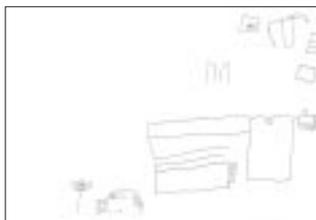


図26 描画 Kt 平面図の様式など



写真30 lh2(f6.2) 室群統括など

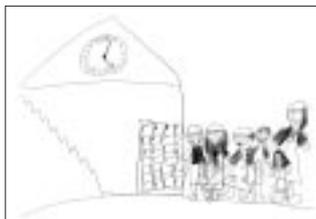


図27 描画 lh2 基底線など



写真31 Ts(m5.3) 室群統括など



図28 描画 Ts 基底線など



写真32 Ty2(f6.2) 室群統括など

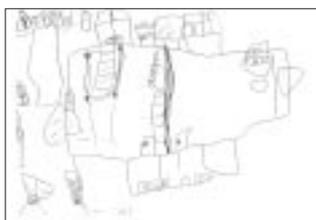


図29 描画 Ty2 平面図の様式など

くなる。個人的に意味のある題材は大きく描かれる<sup>13)</sup>という、内容的側面との関わりが興味深い。全体はならべ描きである。

Uk1(9)は楽しそうに、人形や机や椅子を自分に対面させながら列状を構成する。出入口的壁や衝立的壁、连接的壁も見られる。全体は方向性保持の作品である。描画<6>は要素をならべ描きする。最近映画を見たということで、大きなスクリーンを四角で描くが、全体的に円が多い。Ms1と同様に、オタマジャクシで自分の家族を反

復して描いていく。ここでは母親が一番大きく、兄、父、自分の順で小さくなっていく。

Uk2(11)は机と椅子を列状に並べるが、前回のように正面向きではなく左側を向く。人形も、前は正面向きの列状であったのに、今回はあらゆる方向を向いて群を成す。自己中心的な構成から、対象中心的な構成への移行が見て取れる。描画<8>でも、円に代わって四角を反復して描き、表現様式の構造化が見られる。しかしまだならべ描きである。

Mm3(12)は机と椅子の組合せなどで部分的に場を構成するが、しかし前回同様、列状も多く見られる。描画<9>は、画面下方で外部要素を描いていくが、画面中央では靴入れやカーテンを描く。空間関係はならべ描きだが、構造化の萌芽も感じられる。表現様式はそれに比べてかなりしっかりとしたもので、これは前回と同じ傾向である。

Ks2(14)は一度置いた道具が倒れる度にイライラし、遂にはボード上の道具を全て倒してかき混ぜてしまう。再制作した作品では、門の横にお母さんと園児の群を作り、ボード手前には连接的壁を構成する。描画は全部で三枚。二枚目までは、前日に行われた節分行事の影響で「鬼の家」、「車の幼稚園」などを組立画で描く。KK法での不安定な気分が影響しているようだ。三枚目<11>では、ドアのある壁を描き、画面上方を空とする。僅かながら、空間関係の構造化が感じられる。

この構成的萌芽の段階では、KK法の「列状」と描画の「反復」、そしてKK法の「場の発生」と描画の「表現様式の構造的萌芽」という対応がある。前者の対応は原初的段階にもある。例えば接続する壁の中で、それが構造化した「连接的壁」なのか、構造化していない「列状」なのか判断が難しいものがあり、また反復も同様の特徴を持つ。従ってこれらから判明した、同じものをくり返し配置する図式は、構造化前にも構造化した中にも存在すると思われる。また後者の対応関係から、空間構成や表現様式が共に構造萌芽する図式があることがわかる。

### 2-3-3. 構造化の段階

KK法の「囲いと場の共存」の段階に対応するもの。囲いと場の共存の段階とは、家具類による場とともに、室や幼稚園等を示す不完全囲いや完全囲い(群)、外庭の周りの塀を意味すると考えられる不完全及び完全な包括的囲いといった様々な囲いが見られるものである。完全囲い(群)では、不完全囲いより家具類場が統合される傾向がある。

これに対応する描画の構造化の段階では、表現様式、空間関係ともに構造化が進む。表現様式では全ての事例で組立画があらわれ、四角領域、家の典型的様式など様々な特徴が出現する。特に具象的な表現様式は、全て女兒による。空間関係は、全ての事例で内外要素区別が見られ、おおそKK法の完全囲い(群)に対応して要素間相互の関係付けが見られるようになる。

Te1(15)はこのような小さな道具で遊ぶのが大好きとのことである。ボード右側にできた幼稚園は、三辺を壁で囲い残りの一辺をホワイトボードの縁で代用した不完全囲いとなる。さらに「私のうち」「学校」などと言う幾つかの不完全囲いを構成する。人形に「私」「お父さん」などの役割を与え、口真似をしながら制作と同時に人形遊びを行う。描画<12>は、吉田山へ遠足に行ったという経験から、木のみを組立画でいくつも反復して描く。

Ym(21)は不完全囲いで幼稚園を構成する。家具類による場はしっかりできています。塀を意味する不完全な包括的囲いも見られる。描画<18>では、室内にある遊具類のみを透明画などで描く。

Or1(22)は塀や外壁を意味すると思われる完全な包括的囲いを構成する。この囲いの内部は、まるで図と地が反転したように外庭を意味する。描画<19>は、要素間相互の関係を意識しながら外庭を擬鳥瞰図で描く。幼稚園は家の典型的様式。門や遊具も同様の様式である。

Ty1(23)は内部に、家具類による場を複数含む完全囲いで幼稚園を構成する。その内部は壁で区切られることはなく、場と場の関係は曖昧である。描画<20>もKK法に類似し、幼稚園を四角領域で描く。視点の混合が著しい。「玄関から階段を昇って二階へ行く」という要素間相互の関係付けが見られる。

Tm(24)はレンガ色の壁による连接的壁を構成し、その向こう側に完全囲い群を作る。描画<21>では椅子と机を組立画で描いた後、窓を幾つも反復して描く。彼女は窓がとても好きだと言う。窓と椅子や机との関係は考慮されない。ボード手前側にできる连接的壁は、制作者の世界と制作物の世界とを区別する境界のようなものとも考えられるが、この窓の並びも同様の役割を果たしているのかも知れない。

Ih1(26)は内部に家具が殆ど置かれぬ完全囲い群を構成する。描画は二枚描き、まず「赤組(年少組)」、そして「緑組(年中組)」「黄組(年長組)」<23>と呼ぶ家の典型的様式を反復する。基底線はまだ描かれぬが、画用紙の下端を地面と見なし、それを基準に要素間相互の関係付けを意識する。

Te2(28)は幼稚園や学校などを完全囲い群で構成する。囲い間のつながりを壁で示すところもある。描画<25>は、画面下方を地面と見なし、幼稚園を家の典型的様式で描く。

この構成化の段階では、KK法の「不完全囲い」と描画の「組立画」「内外要素区別」、そしてKK法の「完全囲い(群)」と描画の「家の典型的様式」「四角領域」「要素間相互の関係付け」という対応がある。前者の対応関係から、内外空間を区別する図式があることがわかる。また後者の、完全囲い(群)や家の典型的様式、四角領域などは幼稚園を示す記号的なものである。従って、建物やその内部空間などを典型的記号で示す図式があることがわかる。

#### 2-3-4. 空間的統括の段階

KK法の「壁による全体統括」の段階に対応するもの。壁による全体統括の段階とは、家具類による、より高度に構造化された場とともに、室や廊下や玄関を壁で明確に意味付けして作品全体を統括する室群統括が見られるものである。

これに対応する描画の空間的統括の段階では、要素間相互の関係付けとともに、基底線や平面図の様式がでてくる。

Ih2(30)は、前回は完全囲い群だったが、今回は室相互のつながりを壁で示す室群統括で幼稚園を構成する。制作と同時に人形遊びをする。一枚目の描画<27>では基底線を描き、家の典型的様式で幼稚園を描く。人物は先生と園児、そして年長組の子と年少組の子を区別する具象的表現である。二枚目の描画では家の典型的様式を三つ描き、前回同様それらを「赤組」「緑組」「黄組」と呼ぶ。

Ty2(32)は、前回は完全囲いだったが、今回は室群統括の作品となる。描画<29>はKK法と類似し、平面図の様式で幼稚園を描く。一階部分で大きな四角を描き、上からの視点でトイレや間仕切りなどを描いていく。その後廊下と階段を描き、この四角の上部に二階部分を描く。二階の要素は全て立面図的視点で統一される。

この空間的統括の段階では、KK法の「室群統括」と描画の「基底線」「平面図の様式」という対応がある。これから、空間全体を統括

する図式があることがわかる。

また全ての段階を通して、KK法における家具や遊具や人形などの配置、描画における家具や遊具や家族などの表現のそれぞれに対して、園児の日常生活に固有な諸行動の図式があることがわかる。

#### 結語

1) 描画における表現様式は 構造化前、 構造的萌芽、 構造化の三つに分類できる。 にはスクリブル、円、 にはオタマジャクシ、四角や三角、 には組立画、視点の混合、四角領域、家の典型的様式、擬展開図、擬鳥瞰図、透明画、糸描き画、平面図の様式、基底線、具象的といったものがある。

2) 描画における空間関係は 構造化前、 構造化の二つに分類できる。 には円による包含、ならべ描き、反復、 には内外要素区別、要素間相互の関係付けがある。これら表現様式と空間関係は、互いに密接に競合するものである。

3) KK法の作品と各空間構成を大まかな発達順に列べて対応させ、それらに基づいて描画も列べて、各表現様式、各空間関係と対応させる。それにより、KK法の作品群は原初的、場の発生、囲いと場の共存、壁による全体統括の四つの段階に大別することができる。描画の作品群はそれらに基づき、原初的、構成的萌芽、構成化、空間的統括の四つの段階に大別することができる。

4) KK法の空間構成と描画の特徴との比較により、それぞれの表現手法を越えたところで、両者に共通の図式を取り出すことができる。本論では、園児達の心の中にあると想定される、構造化前における囲う図式、同じものをくり返し配置する図式、ものを自分に対面させて配置する図式、空間構成や表現様式が共に構造萌芽する図式、内外空間を区別する図式、建物やその内部空間などを典型的記号で示す図式、空間全体を統括する図式などという、幾つかの図式の構造的側面を抽出した。また図式の内容的側面の考察は十分ではなかったが、厳しい家庭環境、砂利による崩壊感、お漏らしによる緊張などがもたらす図式と作品との関わりのあることがわかった。

#### 参考文献

- 1) 岡崎甚幸, 伊藤達彦: 居住空間構成法と分裂病者, 日本建築学会計画系論文報告集 第436号, pp.196-208, 1992年6月
- 2) 岡崎甚幸: 居住空間構成法と児童, 日本建築学会計画系論文報告集 第438号, pp.109-118, 1992年8月
- 3) 岡崎甚幸, 大井史江, 山口直子, 浦崎寿輝: 居住空間構成法と知的障害児, 日本建築学会計画系論文報告集 第496号, pp.237-245, 1997年6月
- 4) 河合隼雄: 箱庭療法入門, 誠信書房, 1969: 17
- 5) 河合隼雄: コング心理学入門, 培風館, 1967: 114
- 6) Piaget, J. & Inhelder, B., 滝沢武久訳: 第2章 心像, 現代心理学 知能と思考, 白水社, 1972: 102-103
- 7) 衛藤達吉: 急性分裂病者の回復過程における世界図式の変遷, 芸術療法 vol.16, 1985: 8
- 8) 中井久夫: 中井久夫著作集 第1巻 分裂病, 岩崎学術出版社, 1984: 47-82
- 9) Luquet, G.H. 須賀哲夫監訳: 子どもの絵, 金子書房, 1979
- 10) Lowenfeld, V., 竹内清ほか訳: 美術による人間形成, 黎明書房, 1963: 162, 183
- 11) 岡本夏木他監修: 発達心理学辞典, ミネルヴァ書房, 1995: 76, 372, 495
- 12) Arnheim, R., 波多野完治・関計夫訳: 美術と視覚, 美術出版社, 1963: 220, 225, 227
- 13) Thomas, G.V. / Silk, A.M.J., 中川作一監訳: 子どもの描画心理学, 法政大学出版局, 1996: 64, 134
- 14) 木村晴子: 箱庭療法, 創元社, 1985: 21
- 15) Wallon, Ph. / Cambier, A. / Engelhart, D., 加藤義信/日下正一訳: 子どもの絵の心理学, 名古屋大学出版会, 1995: 191